# 漁況海況予報事業浅海定線調査
# (陸　奥　湾)
# (要　　約)

三津谷　正・山中　崇裕・浜田　勝雄ほか調査船「なつどまり」乗組員

この調査は、陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報のための基礎資料を得ることを目的に実施しているものである。本年度は継続18年目の調査年次であった。なお、詳細については、別途「漁況海況予報事業浅海定線調査結果報告書（陸奥湾）」（平成２年11月）により報告した。

## 調　査　内　容

(1)　調 査 点：湾内でStn. １～６の６定点、湾口部でStn. A、Bの２定点。

(2)　回　　数：平成元年（1989年）中に毎月１回、計12回。

(3)　項　　目：気象、水色、透明度、水温、塩分、溶存酸素。調査水深は、水温と塩分については各Stn.とも０m、５m、10m以深から底層（海底上１～２m）までの間は概ね10m毎、溶存酸素についてはStn. ２、４の５m、 20m、底層、Stn. １、３、５、６の底層のみ。

## 調　査　結　果

(1)　1989年における水温の年変化範囲は、調査点全体でみて、最低が各層とも4.0℃～4.1℃（２月）、最高が表面（０m）で23.9℃（８月）、中層（20m）で22.1℃（８月）、底層で20.3℃（９月）であった。平年（'78～'88年の過去観測の月別平均）にくらべると、１月は平年並み、２月からは平年より高めとなり６月まで高温傾向がつづき、７月は上層で平年より低く、下層は平年並み、８月は上層で平年並みながら、下層では湾央部周辺で平年より低く湾奥部で高め、９月、10月も同様の傾向がつづいたが、11月には全体に平年並みとなり、12月には平年より１～２℃ほど高めとなった。年間を通してみれば春季の高温傾向が目立った。

(2)　塩分の年変化範囲は、調査点全体でみて、表面で33.21（９月）～34.28（１月）、中層で33.45（11月）～34.32（７月）、底層33.47（12月）～34.43（７月）であった。平年にくらべると、８月までは前年（1988年）春以来の平年より高めの傾向（海域によっては上層で平年より１以上も高め）がなおつづいた。この高塩傾向は９月になりようやく緩みはじめ、11月、12月は平年並みに推移した。

(3)　溶存酸素の底層の年変化範囲は、調査点全体でみて、4.5mg/ l（飽和度56.3%、９月）～10.2mg/ l（飽和度99.2%、２月）であった。年間最低値はほぼ例年同様の水準にとどまり、最低期の期間も比較的短く、おおむね例年と大差なく推移した。

(4)　水色は、１月に湾口部で３～４、10月に湾央部と東湾側で５～６が観測されたが、このほかは４～５の範囲であった。

(5)　透明度の年変化範囲は、調査点全体でみて７m（９月）～28m（２月）であった。各海域とも、概ね５月と８月に高く、９月ないしは11月に低めとなる傾向が目立った。